

書評

「日本近代文学と宗教」研究書五書

——この一年間における——

辻 橋 三 郎

柳 田 知 常 著

『作家と宗教意識』

サブタイトルに、この一年としていながら、昭和四六年一二月刊の本書を冒頭にすえたことに、異議が出るかも知れない。しかし、年末の書物は、年末匆忙の間のこととて、翌年初頭の発行とみなしてよく、その上、本書のごとく、文学と宗教の機微を、柔軟に、しかも根原において、描破した書物は、全く、数少ない。敢えて、この書物を取り上げた理由はそこにある。さて、一言にして本書の性格をいえば、心憎いまでの、味わい深いエッセイというのが、それである。

エッセイという用語は、曖昧だという人があるかも知れない。それで、『文学用語解説辞典』（福田陸太郎、村松定孝編、東京堂出版、昭和46・1）にある、定義に聞いてみよう。「フランスの原意は『試み』の意。モンテーニュが一五八〇年に自分の短い論説をそう呼んだのが始まりだというが、こういう形式の文章は古くからある。物事を分析した

り、解釈したり、批判したりするけれども、いわゆる論文よりは短く、組織的でもなく、ふつうには限られた、しばしば個人的な観点から主題を扱っている文章。完全な体系をもった論述をすることを目標とはしないから、短いものが多いけれど、長さについて厳密な基準はない。」「エッセイには親しみ深い調子をもち、ユーモアやウィットに富むものが多いが、固苦しい文体のものもないわけではない。しかしある種のおもむきのある文体をもつエッセイが読者を喜ばせる」。柳田氏のエッセイは、上記の条件を満たして、ときに、実証的操作をも欠落せず、そのような学的労作としての性格までも兼備しているものでもあるところから、評者は、冒頭で、心憎いまでの味わい深さをもつという表現を使っていたのであった。

前置きの長い書評ということになり、誠に恐縮だが、本書が、異色のある論集であることを、強調したいがためであった。内容の論評に入ろう。

× × ×

本書は、三部に分かれ、それぞれは、次のような作品論から成っている。(Ⅰ)は「人間失格」(太宰治)、「一路」(丹羽文雄)、「日記」(高見順)、「山の音」(川端康成)などで、罪、悪、赦し、死の問題を主題として、考察している。(Ⅱ)は「民衆の中から生れた日本の近代の宗教」「日本人の霊または靈魂について」の五篇である。すなわち、「教祖様」(芹沢光治良)、「先祖の話」(柳田国男)、「邪宗門」(高橋和巳)、「英霊の声」(三島由紀夫)、「ミンドロ島ふたたび」(大岡昇平)などがとりあげられている。(Ⅲ)は「美しい女」(椎名麟三)「小さい町」他(小山清)、「われ深きふちより」他(島屋敏雄)、「沈黙」(遠藤周作)、「わが子キリスト」(武田泰淳)の諸作で、前四作はクリスチャンの作品、後一作は、仏家出身者の作であるが、特定の信者の作物として一括したと、著者はいう。

× × ×

第一部では、先ず「人間失格」について、考えてみよう。「人間失格」は、観念過剰の、非芸術的な安易な作品で

ある。それだけ「不幸にならなければ、人の本当の事は解らぬ」と、信じ切っている本心の露呈した作品、「不幸の眞実性に溺れ」きっていた作品といえると柳田氏はいう。しかし、一方、太宰が罪人として、イエスの呼び掛けに素直に応答できる謙遜と柔和の中にいたことをこの作品は示しているという。しかも、日本のキリスト教界と、キリスト教徒がこのやうな人々に対して無力であつたことを糾弾するとともに、「信仰と文学とがこれ程甚しく離れている国において、健全な文化が成長する理由がない」という文明批判にまで、筆は及んでいるのである。学的操作を背景にもつエッセイの典型として、評者は、この第一論文「人間失格」を高く評価しておきたい。

第二部では、「先祖の話」論と、「英霊の声」論とが、面白かった。柳田知常氏に、神道に関する俗説が、先入観としてなかっただけに、柳田国男の説く本ものの神道論が、柳田氏の中に沈澱していく様相が読みとられて、興味深い。日本人の神とは、先祖の霊をいい、その神は、正月と盆とに、子孫を訪れてくるという、柳田国男の固有信仰説を、柳田氏は、初めて知ったようである。そこから、日本人の楽天性の基礎には、村落をとりまく山々の頂きに、死後の靈魂の休らう「楽園」があるという御霊信仰があるのではないかという柳田氏の推定がなされているのも瑞々しく面白い。そして、「先祖の話」論は、次のような言葉で結ばれている。

「嘗て私たちは家の重荷から脱れて、自由に解放されたいと願った。その願いは十分になえられたが、解放された自分の身の回りを眺めて見ると、一つとして堅固な拠りどころというものが無い。こういう事で、これから三十年五十年経てば、いよいよその心細さがつのつて来るように思われる。昔の人の素朴でどっしりした安心に見比べると、一層その事が身に沁みるのである。」

ここには、キリスト者柳田氏の日本におけるキリスト教の土着への問題提起があることを見逃してはなるまいと思う。このように、柳田氏のエッセイは、エッセイでありつつ、常に、エッセイを超えるものを内蔵しているところに特長があるといえるのである。次いで、「英霊の声」では、柳田氏は、最近の日本人がまたもや忌避して通り始めた天皇

に、肉迫しているのである。柳田氏は、「英霊の声」のテーマを「なとてすめろぎは人間となりたまひし」という思想であるとする。柳田氏は、このテーマは、天皇は、「神でないことを承知の上で、神の仮面をかぶれ、神として演技せよ」というのであろうかと、疑問を提出している。この疑問は、実は天皇批判につながったものであることはいうまでもない。柳田氏は、自分の戦前の意識批判を包蔵させつつ、次のようにいう。

「神という言葉の代わりに『宗教感情』という言葉を使うなら、多くの日本人が敗戦まで天皇に対して抱いて来たものは、確かに、一種の『宗教感情』であった。それは、神聖なあるものであって、それに対する侮辱や冒瀆を許さぬものであった。敗戦時の虚脱の中で、私が『国体護持』という言葉で考えつづけていたものは、畢竟は、その神聖なものが汚されるか、汚されずに済むかという、その一点にかかっていたのであろう。人は誰でも神聖なあるものを持っている。大人でも子供でも、男でも女でもそれを持っている。人種・民族を問わず、文化の程度を問わず、過去と現在とを問わぬだろう。」

敗戦によって、柳田氏は「天皇というウロコが目から落ちたと思い」、天皇の「人間宣言」によって日本人すべての天皇への愚かしい「夢」は終わったと思ったが、実はそうでなかったことは、その後の日本の状況が示す通りだとする。

「神聖なものが、天皇と非常に結びつき易いことも否定できぬ目の前の事実である。天皇は、日本人にとって、奥深いところで宗教の役割を果している。しかも、その宗教は日本の神道と同様に他の宗教との共存が可能なのだ。簡単な事では天皇は日本からなくならぬだろう。」

この結末の表現は、もはや警世の言以外のものではない。柳田氏のエッセイ風作品論は、ここにも、氏の骨太い精神構造をのぞかせている。世のエッセイを引き離して、それ自体、文学作品とすらなっているのが、「先祖の話」論と、「英霊の声」論とであった。

第三部の圧巻はいうまでもなく、「美しい女」論と、「沈黙」論とである。「美しい女」論は、結論が、すべてであ

るといい。評者は、そのまま、引用するにとどめて、贅言を加えまいと思う。

「美しい女」とは何だろうか。佐古純一郎氏は、作者によってイメージされる復活のキリストであるという。しかし、作品『美しい女』の本文の中には、キリストという名は一度も出て来ない。できるならば、キリストと無関係に美しい女の意味を考えたい。木村末男の中にあのような美しい女が宿り、その美しい女の故に、木村はあのような生を生きたことが出来た、と考えるだけでは足りないだろうか。私たちの中に――すべての人の中に『美しい女』が住んでいて、人はその美しい女の恵みを受けて毎日を生きている。ただ、その美しい女の中味は人によって違う。椎名麟三は、木村末男の中に住む美しい女について私たちに語ってくれたのである。私たちが、作品『美しい女』を読んで感動するということは、私たちの美しい女の中へ木村末男の美しい女が入って来て、私たちの美しい女が質的に変えられるということではないか。事実、私は『美しい女』を読んだあと、深い平安を与えられた。人が木村末男のように生きて行くことが出来るなら、必ずそこから新しい光が生れるに違いないと私は信じるのである。」

「沈黙」論――。「沈黙」は「神の沈黙」のことであり、「神の沈黙」は、キリスト教信仰の永い歴史の中で、幾度も問題にされてき、しかも、これは、信仰の「蹟きの石」になっていた重要な問題であったという。そして、「詩篇第一、三篇と」、「ヨブ記」があげられてい、その解説に国谷純一郎氏の所論（「背教と救済」『明治大学教養論集』八四二号、昭和43・3／所収）が引用されている。

「ここに神の究極の答としてのイエス・キリストがいるのである。このとき神は沈黙せず、語るのである。すなわち、キリストを通じて、しかもキリストを通じてのみ語るのである。」

柳田氏は、国谷説を「正統的且つ本格的」とし、また、作品がそれを証明しているという。すなわち、ロドリゴが踏絵に足をかけようとした時、銅版のイエス・キリストは、「踏むがいい。踏むがいい。」「お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。私はお前たちに踏まれるために、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったの

だ。」というところに、神が、イエス・キリストを通して沈黙を破った語りかけがあるというのである。しかし、作品における、ロドリゴの後半は、まことに悲惨で、神の語りかけは、人間にとつての「全き解決」になっていないのではないのかという問いを、柳田氏は追っていく。そこで、内村鑑三が、愛嬢ルツ子を喪った時の短文（『聖書之研究』明治45・2）、ならびに詩（「我等は四人である」）を引用し、柳田氏は、「ルツ子の死によって、鑑三の信仰が真に確立されたと言つてもいいであらう」と、鑑三による「神の沈黙」についての、一つの解決を示している。その詩の一部を掲げておこう。

「（前略）我等は今尚ほ四人である、／地の帳簿に一人の名は消えて／天の記録に一人の名は殖えた、／三度の食事
に空席は出来たが／残る三人はより親しく成つた、／彼女は今は我等の衷に居る、／一人は三人を縛る愛の絆となつた。（後略）」

要するに、柳田氏は、「沈黙」では、本来の意味での神の語りかけは書かれてはいないとするのだが、しかし、「神の沈黙への肉迫は十分になされた。それは、読み終つた後、読者の心の奥に鳴りひびいて止まぬのである。日本の今までの文学になかった深い主題がそこに置かれてある。」という評価で結んでいる。「沈黙」読後の感動の中で、冷静な批判と、正確な評価とを下し得るところに、柳田氏の、成熟した小説読みの実力を、評者は見出すのである。

ともあれ、評者は、柳田氏の、肩肘張らぬ、しかも、正鵠な批評文を、学的操作に裏づけられたユニークなエッセイとして、深い敬意をもって、推薦したい。さて、書評というものは、必ず一つは、欠点を指摘することになっている。しかし、評者は、柳田氏のような柔軟なスタイルの文章を書く能力を欠除しているだけに、羨望の思いに終始した。四六年度の書物という書評一般として例外の一文を草した所以はそこにある。

（緑地社、昭和四六年一二月五日刊、三一四ページ、定価八五〇円）

中野 恵 海 著

『近代文学と宗教——丹羽文雄と親鸞など——』

著者は名前を一見しただけで、寺院の出身であることは推測がつく。サブタイトルにもあるように、丹羽と親鸞の関係が主論文であるが、「など」というのが、椎名麟三論、遠藤周作論をさしているのである。しかし、著者の本領とするところは「近代文学と仏教」なので、「丹羽文雄と親鸞」を中心に、眺めてみたいと思う。この論文は「一、小説『青麦』まで」、「二、小説『青麦』論」、「三、『青麦』以後、『有情』まで」、「四、『一路』とその後」とから成っている。はじめから総括をいうようだが、この一連の論文の中で、(三)の「青麦論」が、圧巻でクライマックスともいい得る論考である。この評価の根拠は、著者の「あとがき」の言葉による。すなわち、「『青麦』を手はじめに、近代文学の中に宗教文学を見て行こうとして私はどうしても、論証より身証という風な行き方になった。」と、あるのである。評者はこの著者の方法にそって、諸論文を読み進んだ。

「嘗って西田幾太郎博士が語った言葉だというが、外国文学は常に『人間、如何に生くべきか』がテーマになっているが、日本文学にはそれが薄い、と。言うまでもない事だが、人間如何に生くべきかが正面切って問題にされるのが、実は宗教と言うものである。そして、常に人間そのものが大きくその中心問題とされる近代文学、みずから人間でありながら人間を問い、主体であり乍ら主体を問い、世俗のありきたりの答えに満足しえないところの文学精神、この二つは必ず密接につながらなければならぬ性質のものである。丹羽文雄は、親鸞の思想を、現在、文学作品として勇敢に打ち出している殆んど唯一人の作家である。その丹羽の作品を云々する時に、最も注目すべき重要なことは、彼が常に『愛欲』をテーマとする作家であったことと、彼が浄土真宗に属する寺院の長男に生れたと言う事と、この二つである。」

この、「小説『青麦』まで」からの引用文は、中野氏の丹羽文雄の「親鸞もの」(中野氏の用語) 研究の意味と、研究に際しての二つのポイントとを表明したものとみていい。そして、その第一論文は、先ず生母、マダムに「対する絶ち難き愛情の裏がえし、愛より発する抵抗」がエネルギーとなっているデヴィュー作「鮎」(『文芸春秋』昭7・4) に始まる「生母もの」、「海面」(『世紀』昭9・4) に始まる「マダムもの」が、「甘くなつてはならぬ」という姿勢によって規制されつつ生まれた作品群だというのである。その際、若い丹羽は、寺院の方は、殊にその思想の方は邪魔物だとして、意識的に締め出していた。やがて、戦争が終り、「篠竹」(昭和20)、「陶画夫人」(昭和21)、「厭がらせの年齢」(昭和22)、「四十五歳の紋多」(昭和23)、「告白」(世間胸算用) (昭和24)、「爬虫類」(昭和25)などの諸作によって、往年の「生母もの」、「マダムもの」、それから、「客観小説風のもの」を集大成した作品群を相次いで発表した。そして昭和二十七年の「遮断機」(東西文明社、七月)において、丹羽は新しい転機を持ったというのである。この作品は、従来「『甘えてならない者』が、救われないままの現実をそのまま描きつづけた事が一種の『甘え』」であったと自覚し、それを除去しようと「努力し始めた時に生れた作品」だとする。すなわち、「救われないもの、このどうにもならぬものを、どうにかしようという焦慮、その焦慮の中から生れたものが『罪の意識』というものであり、この『罪の意識』の正面に体当たりして、罪に対する『救い』、この『甘え』を徹底的に掘り下げ、採り上げようとしたところにこの作品の本質がある」というのである。この線上にあるもの、換言すれば「親鸞への復帰」、「自伝的作品にも、ついぞ出なかった彼の父を、ひとつの腹をもたせて、とりあげさせることになって書かれたのが『青麦』という小説であった」というのだ。さて、本書中の圧巻は『青麦論』だ。「1 書き出しの文章」において、この時点で、丹羽の到達した「主観的リアリズム」について述べ、「2 鈴鹿の羞恥心」で、彼の「人生開眼」における「罪の意識」を指摘、「3 鈴鹿の坊主嫌い」では、丹羽の寺院生活の描写は、「小気味のいい適確な描写も数多」いが、「そこにある去勢された様な倦怠と嫌悪の中に起き臥す本当の生の地獄を体験した者の眼から見ると、「表

面的な甘い感想に過ぎないように感じられると思える」ときびしく批判している。

「5 如哉の念仏」で、丹羽は、「ふてぶてしいまでに現実そのもの、虚飾的なものをすっかり脱げ切ってしまった」如哉に、浄土真宗の人間像を造型しようとしているとする。丹羽はそのため、妻女須磨と彼とを対比し、「信心のさだまっているたしかさを本人が意識していただろうか」という問いで区別しようとしているが、そこには、自力の考え方が混入し、親鸞の教えに反していると中野氏はいう。そして『歎異抄』第九段をあげて、親鸞のいう救済の安易ならざる構造に言及し、作者は、その間の消息を熟知して筈なのだから、説明あるいは、暗示の労を惜しんで貰いたくなかったというのである。

さらに、未亡人梅原さんとの間柄でも、丹羽は如哉の真宗の人間像に迫ろうとしているという。彼の「念仏三昧の姿」は、「図迂々々しく、いやらしく、矛盾していて、いかにも無慚無愧の振舞そのもの」に見える。しかし、その「図迂々々しさや、非良心さ」は「究極のところ」、「他の何者でもない」「そう在らざるを得ない」「無力者」である人間の「念仏の姿」ではないか、それこそ「人間風情、煩惱具足の只中に坐っているのが如哉の念仏の姿」であり、とりもなおさず真宗の人間像だといおうとしているのであろう、というのである。著者は、ここでも、作者の描写の不足、不充分を指摘している。「6 大悲無倦常照我」は冒頭、「六十のなかばをすぎた如哉の念仏を唱えるすがた」を、「たしかにたれかに見られている恰好」、如哉も、「その目を感じていらしかった」という原文の引用で始めている。そして、このような凝視を、「安っぽい神秘感なしに文芸の上に表現し得たのは丹羽の独創」、「極重悪人の凡夫の上に大悲の常照だいいしやうしやうを設置した事は真宗教義の上では至極平凡な事柄」、「如哉の極彩色なまでの煩惱の姿の上にこの凝視をもって来た事一つで『青麦』は近代文芸の一異色たるを失わず、他の追従を許さぬ『創作』」という風に、中野氏は、『青麦』の意味を闡明し、評価しているのである。

「7 丹羽文学の本質」は、「生母」、「マダム」という女性によって、人生にも、文学にも開眼されたことについて

て、章を新たにしたものである。丹羽文学の分析としては、実に妥当な方法だ。ここでも、丹羽は女性を「愛欲」の側面で描き続けているとし、「女体が罪惡を好む」（傍点―原文）というような筆使いがされている例をあげ、「丹羽は余程、この女性惡に目を覚まされた人間」であり、その「女体にひそむ罪のにおい」の中に、「現実の男性女性の特質を超えた業の深さが宿」っていることを探求している、それが『青麦』という作品だというのである。

中野氏は、丹羽の作品史の中で、『青麦』の位相を明らかにしているが、まことに、見事な位置づけと把握というより他はない。

「親鸞思想を武器にして、以後丹羽は、罪と救済とを追求する。その場合は遂に、終始一貫して変らず、『愛欲』なのである。女体と悦楽と宗教と、これをかほどまでに密着させたところに丹羽文学の特質がある。」「『青麦』が何故問題作か、そして何故にそれが傑作なのか」ということは、「生母もの、マダムものに加えてもう一つ親鸞ものとも言うべきものが、夫等を綜合し、結実したものの力強さをもってここに姿をあらわすこととなったのである。」

以上、『青麦』論は、文字通り身証、論証相まって、他に追隨を許さぬ名論文というべきであろう。身証というアプローチは、寺院出身者以外の者には、到底、手を触れ得ぬものだけに、評者は、著者の信仰に心から敬意を表したい。二つだけ、望蜀の言を添えさせていただければ、本文批評のないことと、同時代批判のより広い渉獵が示されていないことである。それらが煩を厭わず行なわれておれば、より一層、完璧なそれとなったのではなからうか。

「三、『青麦』以後、『有情』まで」においては、先ず、「以後彼は、浄土真宗というものに深々と腰を据え、勇氣とその技倆をふりしぼって、この終生のテーマに立ち向って行く事にな」ったと記して、ここでも、克明に、一つ一つの作品が、彫り深く意味と位置とが問われ、答えられている。なかでも、生母の晩年と死（昭和31・9・20）とを素材とした、「母の日」（『新潮』昭和28・10）、「うなずく」（『新潮』昭和32・1）、「もとの顔」（『文学界』昭和32・1）のとりあげられている「四 生母の死」は、興深い。特に、「嫌がらせの年齢そのものの様な母が自分の生母で

あることに、うろたえもせず、大した嫌悪も覚えず、恥かしくもななく、「この母の一切を素直に認めてゆく」「腰の据わったところ」に眼目のあった「母の日」は、「あるがままの現実」をうけとってゆこうとしているが、これこそ「正に浄土真宗の生き方に直結」した傑作だという評価は、正しい。これらの作品に「祈りの心」をみた亀井勝一郎の言葉をあげ、「人間存在の不確かさと、現実真理に対する疑いをテーマとしたカソリック作家グラム・グリーンの態度にも似通う」としたところなどには著者の学識の深さもうかがわれる。その生母については、「丹羽文雄の母」という一章があり、これは、今後の丹羽研究に資するところが頗る大きいといえよう。「外村繁論―作品とその信仰―」は、要領のいい外村論ということにとめておこう。

さて、そこで、「椎名麟三論―その信仰と文学―」と、「遠藤周作論」とについてである。二人とも、日本に、初めて現われた、本格的キリスト教文学者である。実は、この二つは、キリスト教信者たる評者には、やはり、もの足らぬ論考であった。それは、中野氏の方法が、前にも引用した「あとがき」のことばにあるように、「論証より身証というような往き方」に、原因があった。身証という方法はその人の信仰の基盤に成立するものであり、キリスト者でない中野氏の場合、丹羽論に劣るのは当然であった。

したがって、この二論文は、すぐれた評論家としての中野氏の実力の程が証明されているということの特記するにとめておきたい。

(桜楓社、昭和四七年一二月一〇日刊、二二七ページ、定価二、二〇〇円)

上 田 哲 著

『新考・近代日本文学とキリスト教』

戦後、笹渕友一博士、佐古純一郎氏らの研究、評論に先導されて、日本近代文学とキリスト教の交渉、関係の研究は

長足の進歩をとげた。しかし、これらの業績は、多く、維新後はじめて宣教されたプロテスタントとの関係研究が多く、四百余年前に渡来したカトリック（天主教）との関係研究は、甚しく少ないという、不均衡の時代が長く続いた。そして、今、漸く、これまで黙々と地方にあつて、カトリックとの関係研究に従事してきた上田哲氏の論究が、一本となり、日本近代文学研究はカトリックとの関係研究においても、すぐれた手引きをもった。評者たち、日本近代文学とキリスト教の研究に携っている者には、干天に慈雨の思いである。そこで、ここに一文を綴る次第である。

× × ×

先ず、一言にして、本書の性格をいえば、末尾にある、「近代日本文学とキリスト教研究参考文献目録」が象徴的役割を果たしているように、資料的な新しい発掘に特徴をもつ研究書である。

第一群と第二群に分かれており、第一群は、「蘆花の信仰」、「尚江のキリスト教」、「啄木と天理教」とから成つて、プロテスタントと日本近代文学者との関係が、追究されている。第二群は、カトリックとの関係研究論文群である。すなわち、「芥川龍之介『奉教人の死』出典考」、「『じゅりあ』の吉助』素材考」、「ルマレシャル『聖詠』について」、「与謝野晶子の晩年」、「大井蒼梧研究ノオト」、「賢治とブジエ神父」などである。ただ一つ、第二群のなかで、「啄木とキリスト教」のみは、プロテスタント・キリスト教と、啄木との関係を追尋した論考である。

先ず、第一群から見ていこう。「蘆花の信仰」は、主として晩年の、評者のいう「独自の信仰」に照明が当てられている。そして、そこに天理教の教義の投影を見、天理教の教義についての精細な解説があるが、未開拓の分野のこととて、まことに、興味深く、示唆されるところが頗る多い。すなわち、「蘆花を霊肉二元の相克の苦しみから救ってくれた(?)ものは、賀川氏のいうような『復活のキリスト』でなく（『悔懺僧としての徳富蘆花』）『黎明を呼び醒ませ』第一書房、昭和11・1Ⅴ―評者注）、なんらかの機会にふれた『偉い婆さん』『中山みき子刀自』の教えではなかったらうか」という結論など、今後の蘆花研究にとって、不可欠の資料といえよう。「尚江のキリスト教」も、短文と

はいえ、新見に富み、尚江研究に多大の寄与をするものといえよう。すなわち、尚江が「キリスト教、またはキリスト教社会主義とかかわりをもっていたのは彼の生涯の約七分の一にしかすぎなかった事実」を明示したり、「仏教や基督教などの成立宗教に対してはその形骸化、無力化を厳しく指摘し、天理教や金光教などの創唱宗教に対して」の好意的な尚江の発言（早大雄弁会例会演説「基督抹殺論を読む」、明治44・4）などをあげて、キリスト教社会主義者尚江の「実像」は、キリスト教からも「相当離れたところに位置していた」という結論に到達しているが、この尚江論も、今後の尚江研究に貢献するところが多かろう。「啄木と天理教」は著者の天理教の教義解説の方が面白く、三論文を通じて、著書の天理教研究の深さに敬服した。

第二群の、「芥川龍之介『奉教人の死』出典考」、「『じゅりあの・吉助』素材考」は、ともに、芥川龍之助の吉利支丹ものの素材探求として、まことに面白く、とくに、前者は、三好行雄氏の作品論（『芸術と人生―『奉教人の死』』『作品論の試み』、至文堂、昭和42・6）にもとりあげられてい、好論文としての評価は高い。前者においての出典は、明治中期より大正中期まで信徒間に読まれていた、「スタインシェン師著『聖人伝』の六月十八日の条にある『聖マリナ童貞伝』」ではないかというのであり、後者は、いわゆる隠れキシタンの研究家、田北耕也氏の発見した「天地始之事」という一種の教理物語ではないかというのである。

この二論文は、ともに、カトリック教の伝道士たる著者ならではのもので、日本のプロテスタント・キリスト教の歴史、そのキリスト教と文学との関係には、いささか、仕事もしてきたつもりの評者は、自らの浅学の程を、したたか思い知らされた。敢えて未熟な解説の労をとるよりも、現物の一読をおすすめしておくことにする。「ルマレシャル『聖詠』について」も、著者以外に、研究者はないので、より詳細な論考を期待したい。「大井蒼悟研究ノオト」、「啄木とキリスト教」とは、論文としては、「芥川龍之介『奉教人の死』出典考」とともに、本書中、白眉の論究といえよう。「大井蒼悟研究ノオト」は、大井が文学史の上からは、キリスト教信仰を文学創造と両立させた、戦前における稀有の

詩人歌人であり、また、思想史の上からは、聖母信仰への帰結をもったという事実によって、日本人の宗教意識の解明に大きな暗示を与えるクリスチャンであつたことが詳説されている。「啄木とキリスト教」は、克明に、啄木の作品、日記、書簡の中から、キリスト教の痕跡を拾い出し、一つ一つに、丹念に解説をほどこしている。

「結局、彼はキリスト教と本質的な触れ合いはもたなかった。併し、多くの点でキリスト教の影響を受けたことは否めない。明治の社会主義者たちの多くが、プロテスタント・キリスト教を媒体として社会主義への道に進んだよう（原文へよう／＼）だけだが、へようである／＼とでもあったものの誤植であろう——評者注）。啄木の社会主義についてもそれが云えよう。即ち、キリスト教が彼の社会への眼を開き、それが社会主義との接近の一つの原因となつたのではないかということがある。それと共に又、彼の社会主義の限界についての問題もこの辺にカギがあるのでなかろうかと思考している。」という結論に到達している。ともあれ、啄木とキリスト教との接触についての実態調査は、今後の啄木研究を、より前進させるすぐれた立論といえよう。

「与謝野晶子の晩年」は、昭和一五年九月の、病床でのカトリック受洗についての、司祭の談話が記載されている。次女の七瀬が受洗していたこと、六女藤子の婚家がカトリックであつたこと、そして、鉄幹も昭和一〇年、七瀬さんの手で臨終洗礼を受けたことも記されている（晶子受洗は、『明治文学全集 五一巻 与謝野鉄幹、与謝野晶子集』掲載「年譜」にも、作製者遠藤祐氏によって記されている）。与謝野夫妻はプロテスタントの牧師、賀川豊彦とも交わりをもっていた。賀川豊彦は、第一回訪米の帰途、東京の与謝野夫妻をたずね、賀川の第一詩集『涙の二分』（福永書店、大正8・11）は晶子の序文で飾られている。

これらの事実は、夫妻の内部におけるキリスト教（カトリック、プロテスタントを通じて）という新しい問題を提示しており、今後の、与謝野夫妻研究に、多くの示唆を与えるものといえよう。

最後の「『近代日本文学とキリスト教研究』参考文献目録」は、これまでの類似の目録とは比較にならぬ程の充実整

備を示したもので、今後の本テーマ研究に裨益するところの大きさは、測り知ることができない程だ。これだけでも、本書は、高く評価されるものである。佐古純一郎氏の「純粹の探求」（甲陽書林昭和26・12）、笹渕博士の「近代日本文学とキリスト教」（ナツメ社、昭和27・1）とが、日本文学とプロテスタントとの関係研究の開拓的役割を果たしたと同様に、本書は、カトリックと日本近代文学関係解明の端緒をつけたものとして、ひろく江湖にすすめ度い。

最後に、一、二瑕疵と疑問を付記させていただくことにする。一つは、文献目録における、第一部(C)聖書、(D)讚美歌の項で、研究書名に、多くの記載洩れのあることである。次に巻頭論文「蘆花の信仰」のなかの、「エクスターゼはシャーマニズムの大きな特徴であり、蘆花の信仰がシャーマニティックなものであったことがここにもうかがえる。」という表現についてである。シャーマニズムがエクスターゼを特徴とすることは事実だが、エクスターゼの現象を示すものが、すべて、シャーマニズムとはいえないと思うのであるが、どうであろうか。それから、教派神道（戦前の呼称だが、天理教、金光教などの創唱宗教をいう）や、伝統的宗教意識を、十把一からげに、シャーマニズムという用語で、片づけてしまうことは、学問的手続きとして、粗笨に過ぎないだろうか。一考を煩わしいところである。蛇足ながら、注文をも付記させていただいて、著者の次の著書を期待したい。

（宮入書店、昭四七年一二月二五日刊、二四七ページ 定価九〇〇円）

川 合道 雄 著

『網島梁川の宗教と支芸』

明治文学史、明治思想史の研究は、戦後、格段の成果があげられているが、その史的編成において欠くべからざる人物であるにも拘らず、何故か全体像把握の試みが、未だに果されずにいる、何人かの文学者、思想家がいる。その一人が、網島梁川であった。数少い梁川研究家の一人である川合氏の論考は、これまで何編かは読んでいた。それが今度、

集大成されて一本になったことは、近代文学研究者、特に、評者のように、近代文学と宗教の問題に関心をもっている者には、誠に望外の喜びであった。

x x x

本書は、巻頭の昭和三四年九月刊の『国文学研究』（早稲田大学国文学会）第二〇集掲載の「綱島梁川覚え書―その神秘的宗教思想を中心として―」と末尾の「初期『梁川会』のことども―山月子とのかかわりにふれて」（『山月子回顧ノート―近代の文人・思想家たち』所収、基督教団事務局出版部昭和四七・三）を除いて発表順に、関係論文が収載されている。しかし、読者は、この本の目次に従って読み進むよりも、次の順序に則って読まれた方が敏速かつ充分な理解をもち得るのではなからうかと思う。ただし、これは評者の経験による老婆心であることを付記しておく。すなわち、最初に、末尾にある、前記した「初期『梁川会』のことども」を読むことをお奨めしたい。というのは、一高生藤村操の華嚴の滝投身を象徴とする、梁川の活躍した時代の雰囲気、著者の嚴父、川合信水―山月子氏の編集発行しておられた『誠心』誌上における梁川に関する幾つかの記事、梁川没後の梁川会結成と、川合信水氏も参加したその会合の模様、それについての信水氏宛の書簡など、盛沢山の事柄が列挙されていて、梁川をとりまく状況のなまなましい息吹を感じとることができるとともに、著者と梁川のただならぬ因縁をも察知し得るからである。読者は、梁川研究には、川合氏が最適任であることを、ここで了解するであらう。

次は、「綱島梁川の宗教的評価―文学史的考察への準備的試論―」（初出誌省略―以下も同じ）がよからう。それから、「綱島梁川―断片的序曲―」を一読すべきであらう。タイトルでも、両論文の性格は推測されると思うが、梁川の史的位置と、梁川の簡単な全体像の見取図は、読者の梁川への関心の持ち方を教示してくれるからである。それから、「『見神の実験』序説―梁川初期の禅批判を中心に―」、「『見神の実験をめぐって』の二つを読むべきである。梁川といえは『見神の実験』という言葉が連想される程であるので、これについての知識を蓄えることは、早い方がいいだ

ろう。そして、本書のクライマックスに該当する論文、「梁川の詩観―『病間録』に現れた実意識の詩的展開―」を精読することで、本書の主題たる「綱島梁川の宗教と文芸」の全貌を習得し得る筈である。そのあとは、読者の方で、随意に論文を選択して読んでいけばよろうと思う。このような蛇足とも考えられる前書きを敢えて長々と記したのは、執筆年代の古い論文は、文体がやや生硬で、難解な梁川 of 思想に接近するのに、些かの不便を危惧するからである。評者は、以下このコースを辿った読み方に基づく、紹介と批判とを綴ってみたい。

× × ×

「有名無名を問わず、たとえいかなる末流的存在にせよ一寸の虫にも五分の魂で、自分が勝手に値ぶみされ、正札をつけてさらされる―つまり勝手に対象化されたり、位置づけられたりするの、彼等として許し難いことだとしても不思議はあるまい。いわば思想や芸術（文学）とは、本来そのような意味での自己主張を持つが故にはじめて存在し得るものなのであり、それが思想や文学の独自性―あらゆる人間がその跛行性と不完全性の故に、正に彼そのものであり得るような人間的根拠―にはかならずである。」、研究者として過去、このような対象の一つ一つのそれ自体の存在価値、尊厳性に注目、留意した人があったらうか。寡聞のせい、これ程の真誠摯実な人柄を偲ばせる言葉を、研究者の口から、余り聞いたことはない。このような態度から、「相手を『位置づける』ということ、当然自己をも位置づけるということなくしてはかなわぬ」、「むしろ相手を位置づけようとする努力を通して、自己模索するといふべきであらう」という人生哲学も生れてくるのである。そして、そこから、「歴史的な時間とは決して終った過去ではなく、常に現代と向き合っている。だからこそわれわれはその距離が示す対象の本質的意味、すなわち歴史的意味をはかり得るといえよう。ただ、文学的対象は常にその距離を超えようとするのみならず、現に超えることによって存在している。それは歴史的に規定されるというより、歴史に働きかけることによって生き続けているように思われる。」という、文学史哲学が生み出されてきているのだ。かくて川合氏は、次のような情熱と決断とに到達しているのである。「そこに、い

うならば文学と歴史の避け難い二律背反を垣間見る思いがするのだが、にもかかわらず（むしろそれ故に）、文学史を成り立たせ得るものは何かというなら、やはりそれは文学史家自体の意欲的な挑戦と情熱によるというほかあるまい。そして、多分、人間の歴史を動かしている重要な部分も、文学を生ましめている根元的な何かも、この意欲や情熱と無縁ではあるまい」というのである。

以上のような方法意識と、意欲や情熱に基づいて川合氏の梁川研究は進められているのである。また、以下に抜粋したような梁川における、日本近代文学とキリスト教の関係研究における見識も立派である。「余が見神の実験」（『病間録』）や「神子の自覚」（『回光録』）などの神秘的宗教体験の思想的、文学史的整理、評価に際しても、「『東洋的基盤』と『プロテスタンティズム』／＼東と西／＼のかかわりが、プロテスタンティズムの一義性で価値の先き取りをされている観があり、『関係』として噛み合うことがない。この場合、否定的な伝統的東洋の世界を肯定的に把握する立場も、主点の置き方を逆にすればあるわけで、そのための『複眼』がほしいのである。『…もし、外来のプロテスタンティズムが『正に外来であるが故に』純粹無垢であり『歴史的には千差万別』、それが異教的な東洋的土壌に受けつがれたが故の不純特殊な歪み、ということであれば、その裏返しは、東洋的基盤なら夾雑物さえなければ——という、いわば引き算方式による一種の純粹化論で、思想継承と発展のダイナミックな可能性を追求するには、多分に問題を残さずにはいないのである。」（以上の引用文、すべて「綱島梁川の宗教的評論」より）。このような論旨整然たる方法意識と問題意識の持主であればこそ——論理的思考力の持主であればこそ、ある時には晦渋とさへ見える梁川を解析、整頓し得たのであったと思う。ここにも、梁川と川合氏との邂逅における摂理のあとをうかがわずにはおられない。

梁川・綱島栄一郎のキリスト教入信受洗は、郷里岡山県において、明治二〇年十一月、古木虎三郎牧師の導びきによった。時に梁川、数え年一九歳。明治二五年東京専門学校（後の早大）入学、哲学・倫理により学究的梁川、「理性的人間」梁川が形成された。明治二六年七月の日記に、オールドツク正統派の信仰を捨てたとの告白が見えたが、漸次教会から遠ざ

かった。学校卒業の二八年九月の日誌に、再び、「天地の父、人格の神恋しくなれり」という告白が記され、その翌年、四月三〇日、最初の咯血をみ、逗子から神戸へと転地静養、神戸教会に出席するうち、海老名弾正と接近。やがて『新人』を介して二人の關係は、一層密接となった。かくて、「敬すべき梁川」と、「美しい梁川」という二側面をもった梁川のロマンチズムが開花したのであった。

以上の梁川精神史は梁川自身によって、三期に分けられた。すなわち、第一段階は、「基督に対する無差別的盲信時代」、第二段階は、「二元的懷疑時代」―いわゆる倫理時代、第三段階は、「兎も角も自覺的に一種の理解と同情とを以て基督の完人を観じ得たりとなせる時代」―「調和正信時代」である。その第三期は「学究的倫理生活にも、奥底に深く寂寞がひそんでいることを感じはじめ、ようやく信仰が回復、その合理性を証し得たとする時期である。だが、このような信仰―理知においてなっとくし得た信仰が、ひっきり信仰そのものの獲得とはなり得なかったところに、真の意味での彼の苦悩がはじまらずにはいなかった。」そこから『病間録』の世界が開け、「見神の実験」という神秘的境界が展開したのだった。（以上「綱島梁川」）。

この「見神」というのは、「根本衝動」として、「早くから彼の意識中核に潜在した絶対の体験的欲求、すなわち、安立調和の超越的境地を志向する倫理的宗教的欲求（実意識）の充足達成を意味するもの」であった。換言すれば、「彼自身の悟の内容を伝えんすることば」で、「必ずしも特殊な意味を持」たず、「頓悟」「光耀」「遍照」「基督教の神人合一、仏教の見性開悟」などと同じく、幅広い「宗教的体験の意識そのもの」をさし、「真の宗教的新生活に入る確実な一関門、無限の向上の縁」のようだ。そこで、留意すべきは、「見」の一字に従来慣視以上の重要義を付せん」としたこと、世上、「見」と信とを対せしめては、信の一字に宗教上千鈞の重きを措くを常」としたことに対して、見の一字の重要性を強く訴えんとしたところにある。それは「欲求そのものが、とらわれた相対界からの脱却、超越的絶対境への志向として、文字通りその全体験が全く新たな世界として展開するもの」、言いかえれば、「一つの意識変

革を意味する」ものであった。このような実験は、一方、「信仰の論理」に支えられたものでもあった。（以上、「『見神の実験』をめぐる」）。

こういう「見神の実験」は、「梁川の意識中核を貫く要求」が「神の発見、感得を熱望する宗教的欲求」に基づくものであったことを物語っている。そうした「宗教的欲求」すなわち、実意識と詩的意識とが、詩人によって、「明らかに二元として識別されながら」、「徐々にこの二者が融合一致」される、「つまり実によって一元的に調和統一された『実即詩』の世界が現出」される、そして、「キリスト、釈迦等の大宗教家の意識こそ正にその如きもの、」で「彼等が実の真を伝えんとして宣べたことば」が、「そのまま燦然たる詩語を織りなしている」と、梁川はいつているとする。これは、芸術論の場では、芸至上主義に対する人生のための芸術 (art for life) ということになる。すなわち、「神への思慕に貫かれた倫理的、宗教的欲求」が、絶対志向であるから、詩的衝動の志向、芸術衝動の造型志向は、二次的、副次的なものになったのは当然であった。そこから梁川の芸術論が、「かかる実意識に発する彼の詩観が必然的に詩論であるより詩人論、作品としての詩評であるより詩人評たるを免れず、しかも詩人、芸術家としてのそれではなく、一個の宗教的人間として、その実に触れ得た程度―実意識の深淺、高低に自ずから詩的評価の基準を据え」たものになったのであった。したがって、芸術論としては、「ことば」の問題への閑却を生じたのであった。（以上、「梁川の詩観」による）

要するに、川合氏は、梁川の文学活動を『梁川文集』に代表される前期（明治三〇～三三年）と、『病間録』『回光録』に代表される後期（明治三五年以降）とに分け（「綱島梁川」による）、彼の内部における詩即実、実即詩という宗教と文学との関係を、腑分けしているのである。

最後に上記の梁川の宗教的経験とその表白を、「当代を被った宗教熱、新しい宗教的欲求の勃興に、何より既成宗教への絶望の中から起った」もの、キリスト教と東洋的伝統的な思想基盤との接触を通じて、より新たな発展が志向され

た画期的なもの（「綱島梁川の宗教的評論」による）として、川合氏は、巨視的展望の中で評価しているのである。

評者は、難解な表現と、複雑な構造とをもつ、綱島梁川を、川合氏に導かれて、追いつけるだけで、精一ぱいだった。評者のなかには、川合氏を通して漸く梁川像が定着した。評者としては、川合氏の労にただ感謝するのみである。最後に、梁川が、本書のような、論文集の体裁ではなく、体系的な一書として、より平明簡潔に記述によって、われわれの蒙を啓いて下さることを著者をお願いして、筆を擱く。

（新教出版社、昭和四八年七月一日刊、八八ページ、頒布価 六〇〇円）

小玉晃一 著

『比較文学の周辺』

この書物を、筆者は、一気に読了した。そのような魅力を持った書物が、この、小玉氏の『比較文学の周辺』なのだ。魅力の第一は、平明暢達な、しかも、歯切れのよい文章にある。常日ごろ自分の子供たちからまで、文章の晦渋さを指摘されている評者は、この点、先ず、大いに学ぶところがあった。

次に、小玉氏の守備範囲の広さ―問題意識の広さである。本来、アメリカ文学専攻の著者が、評者の専門とする日本近代文学にも、なみなみならぬ博識を示され、才気溢れる論評を加えられるに至っては、評者たるもの、やや恐怖を覚えざるを得ない。しかも「この十何年間の間に、比較文学関係で書いたものうち半分ほどを選んで一本にまとめた」（あとがき）とあっては、大学の講義、多くの学会の世話役を引受けている著者を知っているだけに、全くの驚異すらあった。

× × ×

最初に、この書物の構成に触れておき度い。(Ⅰ)から、(Ⅴ)までは、夫々が一つの主題に基いて、幾つかの論文から成っているのである。列举してみると、(Ⅰ)比較文学の方法論、(Ⅱ)日本文学研究史(英学史)、(Ⅲ)日本近代文学とキリスト教、(Ⅳ)日本近代文学者論、(Ⅴ)有島武郎論となる。本書評は、「『日本近代文学と宗教』研究書」ということになっているが、小玉氏は、すべての論文において、キリスト教に言及しているので、本書全体を対象とすることにした。

(Ⅰ)では、「比較文学の研究法」が、研究者の条件、方法、対象、研究史と全般にわたり、行き届いた解説がほどこされている。それらが、ことごとく、著書の体験によって裏づけられていることで、読者の方法論形成に、多大の貢献をすることであろうことは、確実である。評者も感銘を受けた一節を掲げておこう。

「研究者は自己の研究の中心的な対象を日本と外国に一つずつもつべきである。そうすれば徐々にその対象とするところが研究の進展とともに必然的にひろがりをみせ、そのため自己本来の研究対象がパースペクティヴにみることで、より鮮明となるからである。」

そして小玉氏の場合、日本の文学者としては、若松賤子と有島武郎、外国の文学者として、ホイットマンが選ばれているようである。

(Ⅱ)においては、門外漢の評者にとって、「明治期の英文学」の「イギリス文学」の結論に大いに教えられた。キリスト教が受容された一面と、ひどく類似しているように思えたからである。「要するに、最初は日本の近代化のために英学を一つの方便としていたのが、中期になって、純粹に文学として英文学を精神文化の産物として受け入れるようになり、後期になって多少進んだ研究段階に入った、というのが明治期における英文学の導入過程であろう。」

(Ⅲ)には、その他、詳細な「厨川白村覚え書」がある。これは、本書中、「若松賤子」とともに、最も精密な、しかも、著書の文学に対する態度の表明されている(「あとがき」)論文である。したがって、「京大時代の白村」の要約

は、小玉氏の研究者としての今後をうかがわしめるものとして興味深い。「深さより範囲の広さをねらい、それによって一人の作家なり一つの作品なりの文学者上の位置を鮮明にする文学史家の態度」が、英文学者としての、白村の態度であったということだが、本書を通観しての小玉氏が、このラフカディオ・ハーンの学統をひく白村に倣おうしていることは、頷けるところである。また、白村が、文学を手段とした文明批評家であらうとし、そのため、文学を庶民的な「人々の手に届くところ」におこうとした態度も、評者が冒頭でふれたように、小玉氏によって平明暢達な文章として継承されているようである。

(Ⅲ) が、本書評の焦点としている「キリスト教と文学」を主題としている章である。第一論文は、角川書店の『日本文学の歴史』第九巻に掲載された「明治前半期のキリスト教と文学」である。このシリーズは、平易な物語体をキャッチフレーズにしていただけに、著者としては、最も得意とする舞台のようである。明治初期のキリスト教伝来の原点として、「長崎の宣教師たち」、「横浜の宣教師たち」、「熊本洋学校」、「札幌洋学校」という、四分類を提示したことは、著者らしい柔軟にして、正確な発想といえよう。笹渕友一博士の高弟らしく、聖書、讃美歌の翻訳、成立の、日本近代文学への寄与に多くのスペースを割いていることも、今後の、聖書、讃美歌の翻訳、成立についての研究を前進させるものとして注目されてよからう。最も小玉氏らしいところは、若松賤子の高い評価である。そうした評価にふさわしく、(Ⅳ) に、詳密な「若松賤子」論があり、彼女への読者の関心を、一層高めてくれるであろう。その一例として、ロングフェローの「世渡りの歌」をあげておこう。これは、*A Psalm of Life* (人生讃歌) の訳である。賤子訳と、英語学界の先人、山懸蠡湖(五十雄)の訳とを比較し、『旧約聖書』の「創世紀」によった原詩に則した賤子訳に軍配をあげ、「英米の家庭的・宗教的文学の者としては最適任」としているところなど、小玉氏ならではの、精査し能わざるところといえよう。評者としては、英文の文章を数多く書いた日本文学者の一人として、その英文の検討を含めて(小玉氏はほとんど読破しておられるようだ)小玉氏の、さらに綿密な賤子像形成に期待したい。「夏目漱石

とキリスト教」では、漱石とキリスト教の関係を、キリスト教側に引きつけて解釈することに、多少無理があるとし、晩年までよく読んだウィリアム・ジェイムスのように、直接神の意識はなくとも、他人の神の意識は尊重は認めたという栗原信一氏の意見（『漱石の文芸理論』）に共感を示している小玉氏に、評者も同感である。というのは、教会の門を一度もくぐったことがない人間、あるいは聖書を愛読していなかった人間、におけるキリスト教の問題を軽々にキリスト教的に解釈すべきではないと思う。人間における、宗教意識一般の問題としての追究は、漱石の場合、特徴的なものとして、一層の精緻な研究を期待するけれども！。

北村透谷については、「日記」をクッションしながら、教派遍歴に焦点を当てたところに、著者の炯眼を見る。

（「北村透谷とキリスト教」）。志賀直哉の場合、内村鑑三との関連において、キリスト教との関係を考えたのは、当然だが、キリスト教と志賀文学とのかかわり方の、次の解説は、明快、かつ的確な指摘といえよう。釈迦・孔子・キリストをあげて、「キリストを勝れた人間としているが、神のないキリスト教を信じていた志賀にとって、キリストが人間であるとの考え方は、ごく自然に出てくるのである。そして女が男を恋うように内村を信仰していた時、志賀にとっての神は内村であった。ところが彼の生き方が内村を超越した時には、エゴイスト志賀の神は自分になってしまった。従って彼は自分の感じ方を最も大事にしている。自分の感性（好悪）以外は信じられないからである。つまり自分が絶対だからである。これは『暗夜行路』の後篇に詳しく述べられている。こうした好悪の感情の激しさ、ひいては正邪を見極める眼こそ、志賀の人間の魅力であり、志賀文学の最大の特色でもあろう。」（「志賀直哉とキリスト教」）。

「国木田独歩雑感」の結語、独歩の信仰は、「自然肯定的、汎神論的で全く主観的な信仰であったが、キリスト教は独歩文学が生れるためになくはならなかった」とは、定説ではあるが、明快である。「湯浅半月の業績」はキリスト教文学の歴史のなかで、半月を位置づけようとしているが、明治・大正の代表的キリスト教文学者として、若松賤子とともに、半月をあげているところに、蓄積された学識に支えられた著者の史眼を読みとり得る。

(Ⅳ)の「若松賤子」はすでにふれた。「夏目漱石とステイヴンソン」では、「人の心の奥にひそむ善と惡の問題を追求」し、「異常さや個性的なものの強さを愛した」漱石と、「Dr Jekyll などではやがて人間の善と惡を扱」い、「冒險と奇を好んだ」ステイヴンソンとの共通点の指摘、「彼岸過迄」の構成が、ステイヴンソンの「新亜刺比亜物語」に学んでいることなどの示唆など、大変面白かった。「谷崎潤一郎と異国趣味」は、いわゆる統計的研究のモデルの一つとして、若い研究者に益するところが多かるう。「ラフカディオ・ハーンの来日前後」も、寡聞な評者には、未開拓の分野と思え、興味深かった。(Ⅴ)の有島武郎關係論集文群は、さすがに著者の、ライフ・ワークの一つだけに、素晴らしい。特に、ハヴァフォード大学における修士論文の紹介と研究は、著者の独壇場の観があり(有島のM・A(修士論文)をめぐる)、近刊の「有島武郎—アメリカ時代の研究—」(笠間書房)が、期待される。また、「有島武郎におけるホイットマン」では、有島の説くローファアは、「外面的にはっきりした輪廓をもたず、絶えずさまよっている人」、「そこら中を歩きまわって偶然ぶつかったものに興味をもつと、それを自分の養分にしようという人種」で、キリストをその代表者としたものであった。その有島はホイットマンの中に、ローファアを見出していたとしているが、これが小玉氏の有島論の原点であろうと思われ、有島、ホイットマンを専門中の専門中とする比較文学者小玉氏の、将来のトータルな有島論を、最終的に待望したい。というのは、小玉氏自身、自己の中に、有島、ホイットマンと同じ、ローファアの要素を自覚してい、その故の、研究と批評との合一された、ユニークな研究の成就が、翹望されてからである。

以上、駆足で『比較文学の周辺』を瞥見してきたが、多くの問題提起にみちた本書は、比較文学のみならず、日本文学研究にも多大の前進をもたらすであらうことを、躊躇なく記して筆をおきたい。最後に、二つだけ誤謬と注文とを記しておく。一つは、熊本バンド成員の一人として、原田助があげられていることは、誤りである。もう一つは、才人の著者の才筆は、時に筆の滑りに任せて、いわでものが、つい、活字になっていることである。「蘆花雑感」に

見える、「いつの時代でも日本では英語を教えるお金になるらしい。」など、論文の表現としては、旧弊な評者には行き過ぎに思われてならない。もっとも、アメリカの研究論文は、読み物風になっているとのことだからこのようなことが日常茶飯事になっているのかも知れないが――。

（笠間書院、昭和四八年七月三〇日刊、三七二ページ、定価八〇〇円）

（著書を御恵送下さった方々に厚く御礼申し上げます。）

昭和四八・九――